

児童期を中心とした自己に関する語りの発達

坂上 ちおり

Recent Research of Narrative Self in Childhood

Chiori SAKAUE

要旨：本稿は、児童期を中心とした「自己に関する語り」を取り扱う実証研究について文献レビューを行った。特に、語りと自己とがどのように相互規定的な発達過程を経るのかについて、実証研究における新たな観点を導くために、自伝的記憶研究の流れと自己概念研究の流れの実証研究を取り上げ、その知見の整理をした。これらのレビューを踏まえて、語りと自己とがどのような相互規定を行っているのか、そのメカニズムを明らかにする必要性は指摘されてきているものの、具体的な実証研究の積み上げや検討は十分でないことを示した。そこで本稿では、自己や語りは一時点での静的な産物ではなく、時間的な流れの中で、個人が自分をどのように意味づけてきたのか、といった観点を今後の実証研究において持つ必要性を提起した。「過去展望・自己・語り」を同時に取り扱いながら、その発達の様相を検討していくことが今後の実証研究に求められる観点である。

Key words：自己 (self), 語り (narrative), 児童期 (childhood)

はじめに

近年、認知心理学領域で行われている自伝的記憶研究や、発達心理学領域での自己概念研究において、語りと自己との関連を検討すべきであるとの指摘がされるようになってきた。

例えば、佐藤 (1998)¹⁾は「自伝的記憶と自己、自我同一性との関連を検討しなければならない」と述べているし、高橋・伊藤・木原・木村・六車・中井・西・千賀 (1997) は、「ナラティブは自己によって語られ、自己はナラティブによって既定される相互規定的な関係にある」²⁾と指摘している。

これらの指摘は、自伝的記憶が自己をどのように形成していくのか、語りの発達がどのようなメカニズムで自己を規定または形成していくのかという問題意識に立ったものである。

しかし、「自分にとって大切な出来事・エピソードの報告から記憶の正確さなどを明ら

かにする自伝的記憶研究」や、「あなたはどのような人ですか、との問いへの答えから自己概念の発達を明らかにする自己概念研究」においては、それぞれに独立した知見が示されてきた。つまり、「自己に関する語り」という点で、ほぼ同一とも見られる心理学的現象を対象としながら、それぞれの理論的枠組みの中で研究が進められており、両研究の関連が論じられることは少なかった。そしてまた、語りと自己、記憶と自己がどのようなメカニズムで発達していくのかの観点からの実証研究は、十分に積み上げられていないのが現状である。

そこで本稿では、それぞれの立場でどのような実証研究が行われており、どのような知見が示されているのかについて整理を行う。そして、この整理を通して、語りと自己との相互規定的なメカニズムを明らかにするためには、実証研究においてどのような観点を持つ必要があるのかについて今後の課題と展開

を探ることを目的とする。

はじめに、それぞれの研究アプローチにおける研究動向を整理する。①認知心理学の理論的枠組みから取り上げられている自伝的記憶研究、②主に発達心理学の理論的枠組みから実証されている自己概念研究を取り上げる。これらの実証研究の整理のなかから、今後の実証研究において持つべき視点、論点を明確にする。

また本稿では、「自己に関する語り」を取り上げるにあたり、対象とする発達段階としては、幼児期、児童期を中心とした研究動向を整理することとする³⁾。

幼児を対象とした記憶研究

ここでは、幼児がどのようにエピソード記憶や自伝的記憶を発達させていくのかという観点に基づいた実証研究の知見を整理する。

従来の認知心理学における自伝的記憶研究では、想起された記憶の正確性、変容性、忘却の度合いが主たる問題とされてきた(下島, 2004)⁴⁾。このような研究のなかでも、発達という視点からエピソード記憶や自伝的記憶を取り上げたものも少なからずみられる。

1. 幼児の語りの発達の方向性

自伝的記憶研究では、「幼児は日々の出来事であるルーティーンの獲得からエピソードを語るようになるという発達の方向性」を明らかにしている。更に年長になるに従って、エピソードについて感情を含んだ語りをするようになることを Nelson (1993, 1996, 1997)^{5,6,7)}が示している。

具体的には、Nelson (1988)⁸⁾が幼児の発話を観察したところによると、子どもの記憶は、日常世界の基本的な枠組みであるスクリプトを構築するための材料として用いられること、また、3歳以前の子どもの発話については、その多くが日々のルーティンについてであることを明らかにしている。

また、Fivush, Hazzard, Mc Dermott, Sarfati & Brown (2003)⁹⁾は子どもがどのように感情的な過去の出来事を報告するか、どのような内容を語るのかについて検討している。感情についての語りに焦点を当てたのがこの研究である。ここでは、暴力にさらされている地域の5歳から12歳の子どもを対象に楽しかった出来事、悲しかった事について尋ねている。結果としては、楽しい出来事については、より多くのこと、より多くの人について語り、詳細な描写を行う。そして、悲しい出来事については、自分の考えや感情について多くのことを語り、その語りの一貫性が高いことが示されている。また、年齢が高いほど、また言語的なスキルを獲得している子どもほど、より一貫性を持った語りをするという。

Fivushら(2003)のこの研究を踏まえて、国内では三輪・仲(2007)¹⁰⁾が幼児を対象とした同様の手続きの実証研究を行っている。その結果、年中児では、日常の出来事の報告が多く、年長児では本人にとって大切な出来事や、印象的な出来事の報告が多いことが示されている。

2. 幼児の語り能力の発達を促すもの…他者とのやりとり

それでは、幼児の語り能力の発達を促す要因とはどのようなものであろうか。Nelson & Fivush (2000)¹¹⁾によると、幼児は記憶能力を発達させ、獲得していたとしても「語りナラティブ」能力やその形式を獲得していないために、十分な語りができないと論じている。語りの能力の発達段階については、子どもは3歳から5歳ごろの間に周囲の人と過去の経験を語り合う経験を積み重ねることにより語り能力を獲得し、それに伴って自伝的記憶を獲得していくとの理論的な指摘をしている。

具体的な実証研究をみていくと、母親の子どもへの語りかけのスタイルによって、幼児

の記憶の語りに差が見られること、そして、ストーリー仕立てで詳細に過去を語り聞かせ、子どもにもそのようなエピソードの語りを促す母親の子どもの方が、過去のエピソードについてより多くのことを報告する傾向にあることをFivush (1991)¹²⁾やNelson (1997)¹³⁾が示している。

つまり、幼児の語り能力の発達を促すものは他者とのやりとりであることが示されている。

更に、(前出の研究では主に養育者が取り上げられているが)他者からの関わりに加えて幼児にとっての仲間関係のなかで、自己あるいは語りを形成していく様相を縦断的に明らかにした発達研究の流れを持つ小松 (2006)¹⁴⁾の研究を示す。

小松 (2006)¹⁵⁾は、幼児が「周囲の他者と関連付け、あるいは比較する中で自分自身を捉えなおす行為」の発達的变化を母親との会話のなかから探る試みを行っている。結果としては、語り子ども自身と周囲の他者(仲間)が、様々な観点からより精緻な形で関連付けられるようになり、その結果、子どもの自己の「輪郭」がより明確に語られるようになるという発達の方向性を示した。また、母親の役割は、始めは子どもの表現を直接修正する支援者的な側面が中心であったが、次第に共同で話題を展開する話し相手としての側面が強くなることを明らかにしている。

3. 記憶研究における知見のまとめ

自伝的記憶研究において幼児の語りの発達の方向性として明らかにされた知見は、以下の通りである。幼児はルーティン化された日常の出来事について語りを獲得し、それが次第に感情や自己を含んだ語りを獲得していく。そしてまた、その語りの獲得を促進するのは、他者との関わりであることが理論的な指摘および実証研究からも明らかになっている。

自伝的記憶研究で取り扱われているこれらの語りは、そこに感情が含まれること、他者

とのやり取りのなかで形成されていることから考えても、出来事の記憶を語っていること以上に、自己そのものを語っていると考えられる。つまり、これまでの自伝的記憶研究で取り扱ってきた主題である「出来事をどのくらい記憶できているか」、また「どの程度正確であるか」といった視点以上に、子どもの発達の重要な側面を捉えているともいえる。

Neisser (1988)¹⁶⁾が「過去の経験についての我々の記憶は、もともと蓄えられた原情報に依存していると同時に、自己をどのように考えているかということにも依存している(p. 54)」と指摘していることとも照らし合わせると、「感情を含む語り」を取り扱っているこれらの記憶研究の知見は、記憶の量や正確さ以上に自己概念そのものを取り扱っていると考えられる。

しかしながら、自伝的記憶研究の領域では、エピソード記憶や自伝的記憶と自己概念との関連は十分な議論がされてきたとは言いがたい(松島, 2001)¹⁷⁾。そこで、次に「自己概念」を取り扱った発達研究を概観することを通して、記憶、自己概念、語りがどのように相互に形成されているのかの観点から新たな論点を探ることとする。

幼児期から青年期までを対象とした自己概念研究

ここでは、幼児期から青年期までの自己について、主に自己概念の発達を取り上げた実証研究の知見について整理する。

自己概念の発達研究では、子どもがどのような側面から自分自身をとらえているのか、その自己叙述の要素を取り上げたものが中心である。これらの研究では、子ども達の自己叙述が外見的なものから内面的なものへ自己叙述の要素が変化すること、そして、それらの叙述の形式は、はじめは個々の要素が羅列的に語られるものから、体系的なまとまりをもったものへと統合されて語られるようになるこ

と、また、この統合の能力は抽象的で体系的な自己把握能力の発達によるものであることが示されている (Harter, 1999)¹⁸⁾。

はじめに、多少古い研究であるが1970年代の海外における研究知見を整理し、その後日本で行われた実証研究について整理する。そして更に、これらの実証研究の問題点を踏まえて方法論的な新しい視点での実証研究を示す。

1. 1970年代の海外の研究

1970年代には、多くの実証研究が行われていた。ここでは、それらの研究を対象年齢や発達段階順に知見をまとめることとする。

3歳から5歳を対象として、自由記述法や文章完成法によって「自分とは何か」を尋ねた Keller, Ford & Meacham (1978)¹⁹⁾の研究では、就学前の幼児の自己概念としては、行動的側面がもっとも中心的な位置を占めることが明らかにされた。

また、「自分とは何か」との問いに対する自由記述を分析した Broughton (1978)²⁰⁾によると、幼児期から児童前期の子どもは自己を身体の一部とみなし、自己概念は身体的側面に結びついていること。また、身体的外見をもとに自分と他者を区別することが多いことを示している。多少年齢が上がると、思考内容やイメージといった身体的内容が、他者のそれと取替えの間かない独自のものであるとの認識が高まるという。6歳から9歳を対象に自己同一性の感覚を取り上げた、Guardo & Bohan (1971)²¹⁾の研究でも Broughton (1978) の知見と同様の結果が示されている。

10歳から18歳を対象に20答法による自己叙述を求めた Montemayor & Eisen (1977)²²⁾の研究によると、居住地、持ち物、身体的特徴などの客観的・外面的特徴による叙述が年齢とともに減少すること。また、職業的役割、実存的な個性化の意識、思想・信念、自己決定の感覚、個としての統一性の感覚、対人関

係のとり方、心理的特徴など主観的・内面的な特徴による自己叙述が年齢とともに増加することが明らかにされている。

年齢が高くなるにつれて、叙述の様々な側面についての内的な関連やまとまりが出てくることを示したのが、Bernstein (1980)²³⁾の研究である。この研究によると、10歳では自分の行動を羅列的に認知しているだけであり、それらの間の内的関連性を理解できない。そして、15歳では自己叙述文の多様性に気づくが、矛盾する行動の間に整合性をもたらす原理を構築することができないという。しかし、20歳では自己の一貫性を維持する統合原理を語ることを示している。

2. 日本における研究

ここでは、海外の1970年代の知見を踏まえて、日本における自己概念を取り扱った研究を2つ示す。

遠藤 (1981)²⁴⁾は、小学校5年、中1、中3を対象に20答法を用いて、自己概念の発達を明らかにしている。結果として、年齢の上昇とともに、対事物・事象関係(外界の事象に対する興味・関心・願望など、自己と外的対象との関わりの記述)の出現率は低くなり、自己叙述(自己の身体的・心理的な特性の記述)の出現率が高くなることを見出している。

また、岩熊・楨田 (1991)²⁵⁾は、小学生・中学生・高校生対象に20答法を実施し、その内容をカテゴリー化したうえで、クラスター分析を行っている。結果としては、能力、身体、所属集団などの社会・生物学的基礎のクラスターが自己叙述の中心的位置を占める段階から、より内面的で抽象的な性格のクラスターや、欲求と自己評価のクラスターが自己叙述の中核にくだり込んでくる段階へ発達することを示している。

3. 新しい方法論による研究

海外における1970年代の研究とその後の日

本における研究をまとめたが、これらの研究は方法論的な問題があると指摘されている。例えば、佐久間・遠藤・無藤(2000)²⁶⁾によると研究者の設定した質問方法は、「非常に抽象度が高いため、特に具体的に思考する傾向のある児童期の子どもにとっては、きわめて難しい質問」であり、子どもたちは十分に答えられていない可能性があるという。実際には、「それなりに豊かな自己理解が存在している可能性」があると論じている。同様に、小松(2006)²⁷⁾もこれまでの実証研究では、「研究者が準備した定型的・脱文脈的な問いに対して言語化される、子ども自身に関する安定した評価・知識」であり、実際に「日常生活の中で表現される過程は、これらの調査とは異なる側面を持っている」と指摘している。

これらの問題点を改善するために、抽象度の高い質問ではなく、具体的な形で子ども達にインタビューを行い佐久間ら(2000)²⁸⁾は、幼児期・児童期の自己理解の発達の変化を詳細に明らかにしている。この研究では、5歳、小2、小4の子どもたちを対象にした調査を通して、以下の3つの点を明らかにしている。まず、①幼児でも心理・人格特性について言及することができること、そして、②児童中期・後期に他者との比較の観点から自己を捉えるようになり、能力に関する言及が増えること。③先行研究においては青年期に至ってからとされる「対人的意味付け」が、この研究では幼児期から見られるし、小学校への移行経験から協調性への言及が多く見られたことである。

4. 自己概念の研究における知見のまとめと展望

自己概念の発達を取り上げた実証研究においては、年齢が上がるにつれて自己に関する記述の要素が多様化すること、そして次第に、その要素をまとめたものとして自己を表し、また矛盾を含みつつも統合した自己記述をす

るようになることを明らかにしている。

加えて、研究上の方法論的な問題を改善することにより、より年少の子どもにおいても自己概念を心理的・人格的・対人的(他者との比較という意味において)にとらえていることを示唆している。

しかし、これらの研究は横断的に自己理解や自己概念の発達段階ごとの特徴を示したり、また縦断的な研究であっても、比較的短期間での変化を追ったものである。つまり、「記憶、自己概念、語りがどのようなメカニズムにおいて相互形成しているのか、どのように発達してきているのか」について、新しい論点を探ることは、まだここでは十分にできていない。

それでは、これらのメカニズムを明らかにするため実証研究においては、どのような観点を持つ必要があるだろうか。

本稿ではその必要とされる観点とは、時間的な流れの中で、個人がどのように自己を積み重ね、「自分とは何者か」といった自己意識を形成してきたのか、その人の人生全体のなかで、どのように自分というものを意味づけてきたのか、といった視点(やまだ, 2000)²⁹⁾であると考える。つまり、個人が過去の展望を含んで「現在の自己」をどのようにとらえているのか、ということに焦点を当てる必要性を提起する。

しかしながら、幼児期や児童期を対象とした実証研究において、「過去展望・自己・語り」を同時に取り扱ったものは少ない。そこで次に、本稿が提起する「過去展望を含んだ自己の語り」の観点を考えるにあたって、有益な示唆をもたらすと考えられるいくつかの実証研究をまとめる。

自己における時間的流れの観点を持つ研究

ここでは、「幼児期の因果関係の語り」を取り扱った研究、そして「児童期から青年期を

対象とした過去展望を含んだ語り」研究の知見を整理し、今後の課題と展開についての示唆を得ることを目指す。

1. 幼児期の語りに見られる因果関係を取り扱った研究

幼児期を対象とした実証研究では、「自分が経験した過去の出来事をどのように意味づけているか」という問題意識のもと、時間的な流れの観点から行われた研究はほとんどみあたらない。そこで、ここでは幼児期の子どもたちが、物語を作成する際にどのように因果関係や起承転結を理解しているか、との観点から行われた研究を示す。

内田(1982)³⁰⁾の研究では、物語の再生課題において幼児期の子どもたちも起承転結の枠組みを用いて語ることを示している。特に、課題の内容の違いについては、空想的な内容を含む物語よりも、「おるすばん」といった日常場面に近い物語のほうがより課題を達成しやすいことを明らかにしている。また、時間的展望理論の枠組みから奥田(2005)³¹⁾は幼児を対象に、出来事の順序性、因果性、連続性を問う4枚の絵カードを並べる課題を実施している³²⁾。この研究では、4歳を過ぎる時期(65ヵ月)になると、多くの子どもが一貫した物語を作成できるようになる、との知見が示されている。

この二つの研究は、物語作成の課題における因果関係の理解の成立を取り上げたものであり、直接に自己を取り扱ったものではない。しかしながら、幼児期においても子どもたちが時間の流れの感覚を持っていることは十分に示唆される。それでは、この時間の流れの感覚がどのように自己概念と関連し、相互に形成されるようになるのであろうか。

奥田(2005)は、先に挙げた研究のなかで同時に、時間的展望を明らかにする目的で赤ちゃんから老人までの6枚の絵カードを順序どおりに配列させる課題を行っている。その

なかで、幼児期の子どもに「自分はどれであるか」を問うと、自己がどのカードであるかが分るのが50ヵ月、過去から現在の自分、そして将来までの絵カードを配列できるようになるのは65ヵ月以上であることを示している。この課題では、直接的に語ることを求めている内容ではないが、赤ちゃんから老人までの人生という時間感覚、そのなかで現在の自分がどこに位置するのかという自己概念を持っていることが示されている。つまり、幼児においても自己を時間的流れのなかで意識していることが示唆されているのである。

2. 児童期から青年期にかけて時間を含んだ語りの研究

ここでは、児童期から青年期を対象として「時間の流れを含んだ語り」を取り扱った研究を示す。

自伝的記憶研究の枠組みから佐藤(2000)³³⁾は、教職課程にある大学生を対象に調査を行っている。この研究は、自伝的記憶がどのような機能を持っているのか大学生の職業選択との関連から明らかにすることを目的としたものである。結果として、教職志望の強い意識群は、教師との関わりにおける不快な出来事の記憶が少なく相対的に快方向に偏っていること。そして、その出来事から影響を受けたという関連を感じていること。更に、「影響を受けた」と認識している出来事は、他の出来事に比べてこれまでに頻繁に思い出されており、現在も鮮明に想起されていることを示している。

この研究についても、直接に自己を取り扱っているものではないが、過去の小学校や中学校などの教師との関わりや記憶と現在の教職課程で学んでいる状況、将来の職業選択といった時間的な連続性の感覚について、その一側面を明らかにしたものである。また、本稿では、過去と現在との「時間的流れを含む自己概念」を提起しているが、この研究では、更

に「将来」を含んでいる点が重要な示唆を持つ。

また, Habermas & Paha (2001)³⁴⁾の12, 15, 18歳の女性のライフストーリーを取り扱った研究では, 年齢が上がるにつれて, 語りに因果関係を示す表現が増えること. ある出来事と心理的な変化の因果関係, 過去と現在の比較, 自伝的な概念などが語られるようになることなどが明らかにされている. これらの結果を受け Habermas & Paha (2001) は, 青年期を通してライフストーリーの一貫性は高まっていくと結論付けている.

この研究は, これまで引用した他の研究と比較すると, 「過去展望・自己・語り」を同時に含むと考えられるライフストーリーそのものを取り上げて, その発達の変化を明らかにした点で興味深い. 特に, 年齢が上がるにつれて過去と現在との時間的な流れのなかでライフストーリーを語る, 自己を語るようになるということが示されていることは, 本稿が提起する「時間的な流れを含む自己概念」の観点を持つべきであるという主張の一つの根拠となるものである.

ま と め

本稿は, 児童期を中心として語りを取り扱っている実証研究について文献レビューを行った. 特に, 語りと自己とがどのように相互規定的な発達過程を経るのかについて, 実証研究における新たな観点を導くために, 自伝的記憶研究の流れと自己概念の発達研究の流れの実証研究について, その知見の整理をした. これら二つの研究の流れや実証研究を概観すると, 語りと自己とがどのような相互規定を行っているのか, そのメカニズムを明らかにする必要性は指摘されてきているものの, 具体的な実証研究の積み上げや検討は十分でないように思われた.

そこで本稿では, 自己や語りは一時点での静的な産物ではなく, 時間的な流れの中で, 個人が自分をどのように意味づけてきたのか,

といった観点を持つ必要性を提起した. 「過去展望・自己・語り」を同時に取り扱いつつながら, その発達の様相を検討していくことが今後の実証研究に求められるであろう. これらの観点で実証研究を積み上げることで, 「過去展望や記憶・自己・語り」がどのようなメカニズムで相互規定しているのかが明らかになってくるであろうし, このような観点から研究を進めることは, 子どもの語りの発達を明らかにするばかりでなく, その後の成人期・老人期の語りの発達研究の発展に貢献するものと考えられる.

文献および注

- 1) 佐藤浩一: 「自伝的記憶」研究に求められる視点. 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 47, 599-618, 1998.
- 2) 高橋登, 伊藤美和, 木原香代子, 木村理恵子, 六車陽一, 中井理恵子, 西美香, 千賀由加利: 幼児期におけるナラティブの発達. 大阪教育大学紀要 第IV部門, 45, 227-246, 1997.
- 3) 本稿で取り上げる発達段階を「幼児期から児童期」としたのは, 幼児期・児童期において, 自己と語りとの相互規定的な発達過程を取り上げることに伴い, それ以降の発達段階である青年期・成人期の人にとって, 語りがどのような役割を果たしているのか, という今後の議論に結びつけることを視座に入れるためである.
- 4) 下島裕美, 佐藤浩一, 槇洋一, 下島由美, 堀内孝, 越智啓太, 太田信夫: 自伝的記憶研究の理論と方法. 日本認知科学会テクニカルレポート, 51, 24-26, 2004.
- 5) Nelson, K.: The psychological and social origins of autobiographical memory. *Psychological Science*, 4, 7-14, 1993.
- 6) Nelson, K.: Memory in early childhood-

- The emergence of the historical self-
Language in cognitive development,
Cambridge University Press., Cambri-
dge, 1996, pp.152-182.
- 7) Nelson, K.: Finding one's self in time.
*The self across psychology – Self-
recognition, self-awareness, and the
self concept* – (J. C. Snodgrass & T.
Thompson). *Annals of the New York
Academy of Sciences*, **818**, 103-116,
1997.
- 8) Nelson, K.: The ontogeny of memory
for real events. *Remembering recons-
idered* (U. Neisser & E. Winograd).
Harvard University Press., Cambridge,
Mass, 1988, pp.244-276.
- 9) Fivush, R., Hazzard, A., McDermott,
J., Sarfati, D. & Brown, T. : Creating
coherence out of chaos? Children's
narratives of emotionally positive and
negative events. *Applied cognitive
psychology*, **17**, 1-19, 2003.
- 10) 三輪智子, 仲真紀子: 子どもによる感情
的な出来事の語り－日常のルーティン,
ポジティブな出来事, ネガティブな出来
事－. 日本心理学会第71回大会論文集,
1081, 2007.
- 11) Nelson, K., & Fivush, R. : Socialization
of memory. *The oxford handbook of
memory* E. Tulving & F. k. M. Craik,
Oxford University Press., New York,
2000, pp.283-295.
- 12) Fivush, R. : The social construction of
personal narratives. *Merrill-Palmer
Quarterly*, **37**, 59-81, 1991.
- 13) 前掲, Finding one's self in time. 103-
116.
- 14) 本来, 本研究は発達理論の枠組みの研究
であり, 自伝的記憶研究の流れを汲むも
のではない。しかし, 自伝的記憶研究で
示されている知見と照らし合わせながら
本研究を引用することが論述の流れとし
て適切であると判断し, この位置で知見
を示した。小松孝至: 母子の会話の中で
構成される幼児の自己－「自己と他者と
の関連づけ」に着目した1事例の縦断的
検討－. 発達心理学研究, **17**, 115-125,
2006.
- 15) 同上
- 16) Neisser. U. : Five kinds of self-knowledge.
Philosophical Psychology, **1**, 35-59, 1998.
- 17) 松島恵介: 記憶と自己. 児童心理学の進
歩 (高橋恵子ほか), 金子書房, 東京,
2001, pp.127-153.
- 18) Harter, S. : *The construction of self-
A developmental perspective*-. The Gilford
Press, New York, 1999.
- 19) Keller, A., Ford, L, H. Jr., & Meacham,
J. H. : Dimensions of self-concept in
preschool children. *Developmental
psychology*, **14**, 483-489, 1978.
- 20) Broughton, J. : Development of concepts
of self, mind, reality, and knowledge.
New directions for child development,
1, 75-100, 1978.
- 21) Guardo, C, J., & Bohan, J. B. : Development
of sense of self-identity in children.
Child development, **42**, 1909-1921, 1971.
- 22) Montemayor, R. & Eisen, M. : The
development of self-conceptions from
childhood to adolescence. *Developmental
psychology*, **13**, 314-319, 1977.
- 23) Bernstein, R, M. : The development of
the self-system during adolescence.
The journal of genetic psychology,
136, 231-245, 1980.
- 24) 遠藤毅: 自己概念に関する研究. 日本教
育心理学会第23回総会発表論文集, 420-
421, 1981.
- 25) 岩熊史朗, 槇田仁: セルフ・イメージの発

- 達的变化－WAI技法に対する反応パターンの分析－. 社会心理学研究, 6, 155-164, 1991.
- 26) 佐久間(保崎)路子, 遠藤利彦, 無藤隆: 幼児期・児童期における自己理解の発達－内容的側面と評価的側面に着目して－. 発達心理学研究, 11, 176-187, 2000.
- 27) 前掲, 母子の会話の中で構成される幼児の自己. 115-125.
- 28) 前掲, 幼児期・児童期における自己理解の発達. 176-187.
- 29) やまだようこ: 人生を物語る－生成のライフストーリー－. ミネルヴァ書房, 京都, 2000.
- 30) 内田伸子: 幼児はいかに物語を創るか?. 教育心理学研究, 30, 211-222, 1982.
- 31) 奥田雄一郎: 時間のはじまり, 物語のはじまり－時間的展望の発生とナラティブ発生に関連についての実験的検討－. 中央大学大学院研究年報, 34, 175-185, 2005.
- 32) 例えば, 「女の子が花を摘んでいる間に男の子が女の子のぬいぐるみを持って行ってしまい, 女の子がぬいぐるみがなくなっていることに驚くストーリー」などが絵カード課題として用いられている.
- 33) 佐藤浩一: 思い出の中の教師－自伝的記憶の機能分析－. 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 49, 357-378, 2000.
- 34) Habermas, T. & Paha, C.: The development of coherence in adolescents' life narratives. *Narrative Inquiry*, 11, 35-54, 2001.